

「にににに、にいちゃん。まだかな？」

「ば、ばか！ もっと大人の余裕をもって待ってろ。この童貞野郎！」

「ごごごご、ごめんよう兄ちゃん」

ルグニカ王都の一角にある歓楽街。その区画の中に立てられた豪華なホテルの一室にて、2人の男がパンツ一枚の姿でそわそわしていた。

1人は小柄で人相の悪い、いかにも小者という雰囲気が出ている人相。もう1人はそれとは対照的に腹が出っ張った肥満体質の巨漢で、既に汗だくになっておろおろと慌てていた。

小柄の方が兄のグリー、肥満の方が弟のロソウェル。共にルグニカでも1，2を争う程の財力を持った貴族の息子達である。

「デュフッフ、デュフッフ♪ で、でも楽しみだなあ。またレムリンとセックス出来るなんて。やっぱりレムリンもぼぼぼ、ボク達のこと好きなのかなあ？」

「バカやろう！ あいつは奴隷だぞ？ 俺達の性処理道具だ！ ったく、性欲が恋愛感情に直結してっから、童貞は始末が悪いんだよ」

「どどどど、童貞なのは兄ちゃんが先にレムリンに入れちゃうから……」

「手で先に出しておっ立たなくなったのは、てめえが悪いんだろうが。ったく、情けねえ弟だぜ」

そうやってやたら弟には強気な口調だったが、そう言っているグリーの方も明らかにそわそわとしている。

そして股間にテントを張っているのは、2人とも同じだった。

「お待たせいたしました。ロンウエル様、グリー様」

そしてついに扉の外から待ちわびた少女の声が聞こえてくる。

前回の“接待”を受けてから、この声の主の虜になった2人は、それを間違えるはずがない。グリーもロンウエルも鼻息を荒くしながら、我先に扉へと向かって来客を迎える。

「この度もレムをご指名下さいましてありがとうございます。精一杯おもてなしいたしますので、どうぞゴッデス様のことをよしなをお願いいたしますね」

扉を開けて姿を現らしたのは、メイド服に身を包んで、まだあどけなさを残した顔を笑顔にした青髪の少女――レムだった。

「おほおおおっ！ レムりん、レムりんっ！ ボクだよお、覚えてる？」

「はい、覚えていますよ。ロンウェル様。ご無沙汰しております」

「ケッ、来るのがおせえんだよ！ こっちは大金はたいて買った客だぞ」

「申し訳ございません、グリーン様。何せ急なお声掛けだったもので.....ただ、その分は精いっぱい頑張らせていただきますね」

怒ったような雰囲気グリーンと、明らかに歓待ムードのロンウェル。その2人の間をツカツカと歩き、レムは部屋の中に入って行く。

「それでは、グリーン様はエロエロ痴女に搾られプレイ、ロンウェル様はドスケベイチャイチャラブ恋人プレイでし  
たね。今日は3人で、思う存分楽しみましょう♪」

レムは目を細めながら妖艶な笑みを浮かべて2人にそう言った。

□■□■

「あむ.....んぐ.....ちゅうう.....」

「ぢゅるるる〜っ♡ ぢゅばっ.....ぢゅぼっ.....ぢゅぶううっ♡」

べっどの上に座ったグリーの背後から、下着姿のレムが身体を密着させていた。両足を後ろから前に伸ば

し、足の裏でグリーの肉棒を擦りながら、首を反らして上を向かせたグリーの唇を貪る様に舌を伸ばしていた。

「ん、ぐ.....死ぬっ.....ちゅば.....んぐっ.....」

「ちゅうううっ.....れろれろっ.....グリー様、可愛いですよ。ふふふ、舌を伸ばして下さい」

そう言ってレムはグリーの舌を伸ばさせると、その舌の上にトロリと唾液を垂らしていく。

「マゾチンポがレムの足に挟まれてビクビクしていますよ？ 貴族の癖に童貞で恋人が出来たこともなくて使い道のなかったマゾチンポ、レムの奴隷マンコで童貞卒業出来て良かったですね.....ふーっ.....れろ、れろ.....ちゅばっ.....ちゅううう」

「〜〜っ！ っ！ っ！」

耳元で囁かれながら耳穴を舐られ、そしてレムは再びグリーの唇を貪ってくる。するとレムの言う通り、グリーの肉棒はビクビクと嬉しそうに震えている。

「頑張って下さい、グリー様。足マンコでチンポ汁出しちゃったら、奴隷マンコで気持ちよくなれませんよ？ また一杯オマンコでぎゅうぎゅう締め付けられて、気持ちよ〜くチンポ汁ビュービュー出したいでしょ？ 我慢、我慢♪」

「おおおおお！ む、無理.....はむ.....ちゅぱっ.....無理いい.....れろれろ」

穏やかな口調で優しく言うがレムだったが、舌と足の動きはその動きに反比例して、グリーの肉棒を射精を促すように激しくなっていく。

それでも何とか耐えようとするグリー。そうやって必死に頑張るグリーに、レムが再び耳元に唇を寄せると。

「なーんちゃって.....勃たなくなっても、キントマが空っぽになるまで強制的に勃起させますから、足マンコで好きだけ出していいですよ」

「っっっ！ おああああ〜っ！ レム様っ！ も、もう.....！」

「いいですよ。出す時は何て言うんでしたっけ？ 大きな声でレムに聞かせてくださいっ♪」

貴族の息子であるグリーが、奴隷の自分を様付けて呼ぶ——そんな立場が逆転した状況に、レムは舌なめずりをしながらうっとりすると、後ろから手を伸ばしてグリーの乳首を弄りながら、足で肉棒を激しく擦り上げる。

「イ、イク〜〜〜っ！ イキますっ！ レム様に足マンコで、チンポ汁射精っ イクっっ！ っっっはむううっ！」

レムの足の間で膨らみ精を吐き出す瞬間、レムは再びグリーの唇を塞ぎながら、親指で亀頭を擦って、グ

リーを絶頂に導く。

上を向いた肉棒からは潮を噴くように白濁液が音を立てて発射され、レムに抱き着かれた中でグリーンはビクビクと全身を細かく震わせていた。

「はあー……はあー……うっ……あああ……」

激しい絶頂の余韻で脱力したグリーンは、そのまま後ろ手に手を突いて身体を支えて大きく息を吸って喘ぐ。

しかしすぐにグリーの正面に回ったレムは、ブラジャーを取り払ってグリーの前にかがみこむと、乳房で射精したばかりの肉棒を挟む。

「っあああ？　だ、だめっ……もう無理……止めて……っ！」

「まだ3回目ですよ、グリーン様？　どんなに泣いて叫んでも徹底的に搾り取ってくれて……くすくす、どれだけマゾチンポなんですか。いいですよ。グリーン様のお父様がゴッデス様と懇意にして下さるなら、レムは何度だって射精させていただきますから」

そう言いながら、レムは用意していたローションを自らの胸元に塗りたくりながら、乳房の乳圧でグリーの肉棒を刺激していく。

「っふおっ！ おおっ！ し、死ぬっ.....気持ち良くて死ぬっ！ もう、勃起無理い.....っ！」

「ふふふ、こうして先っぽをレムの乳首でコリコリしてあげると.....ほら、また大きくなってきた。っんん♡ どうですか、レムも乳首が硬くなってるのが、わかりますか？」

そうして息を弾ませながらグリーの肉棒を胸で熱烈に奉仕するレム。

そんなレムの背後に、ヌツと近づく巨体があった。

「ずずず、ずるい。兄ちゃんばかり。ボクも、レムりんといチャイチャしたいんだな.....！」

「ロンウェル様っ.....♡」

後ろからロンウェルが、下着に包まれたレムの尻を撫でてくる。するとレムはロンウェルが触りやすいように、腰を突き上げるようにして四つん這いの格好になってグリーへの奉仕を続ける。

「はあ、はあ.....レムりん♡ お尻、柔らかいんだな.....へっ、へっ.....ぶちゅううっ」

「ああんっ、ロンウェル様あっ♡」

ロンウェルが肉厚な唇を尖らせて、レムの尻肉に吸い付いてくる。そこからべろりと舌を暴れさせるように舐めまわし、唾液の後を作っていく。

「あああっ.....ロンウェル様の舌.....柔らかくてねっとりしてて.....はぁぁ♡ レム、愛されてます.....幸せにな  
っちゃう.....」

「おぁぁぁぁっ！ む、胸え.....パイズリ、激しいっ！」

ロンウェルに臀部を責められると、レムは身体を擦らせるように動かしながら、両手で乳房を持って肉棒を  
マッサージしていく。するとグリーも、甘い声を漏らしていく。

「ちゃ、ちゃんと兄ちゃんも気持ちよくして欲しいんだな。そそそそ、その代わりボクがレムりんを気持ち良くする  
からね」

「は、はい.....ロンウェル様ぁ.....♡」

目尻を下げながら甘えた声を出すレムは、ロンウェルはレムのショーツを脱がしにかかる。レムはロンウェルが  
脱がしやすいように、動きに合わせて腰を動かすと、ロンウェルに向けて秘部が丸見えになってしまう。

「おほおほ.....オマンコもお尻の穴も丸見えだよお、レムりん♡」

「は、恥ずかしいですっ.....で、でもロンウェル様になら.....レムの全てを見られてもっ.....あむっ.....ちゅば.....っ  
♡」

「ああああっ♡ レム様っ.....口マンコ、いいっ！」

レムは胸の間にある肉棒に舌を這わせると、両手を尻の方へもっていき、自ら尻肉を掴んで秘部をアナルを曝け出す。

「むふおおおおっ♡ 可愛いよ、レムりんっ♪ そうそう、そうやってまずは兄ちゃんをイカせてやって。ポボポボ、ボクはレムりんのおおっ.....」

興奮した様子のロンウェルは、用意していたとある道具を持ち出してくる。

それは魔力を込めると、自動的にうねうねと卑猥な動きをするアナルバイブだった。ロンウェルはそれを嬉々とした表情でうねさせながら手に持ち、もう片方の手で、既にビショビショになっている秘裂から愛液を掬い取りながら、アナルへと塗り込んでいく。

「っあああ.....口、ロンウェル様っ.....それは.....っ」

グリーへの奉仕を続けながらレムは後ろを振り向く。その表情は嬉しそうに蕩けていた。

「い、いいからレムりんは兄ちゃんのを口に啜えて。だだだ、大丈夫だよ。レムりんが好きなことは、恋人のボクが一番分かって.....るからあああ！」

「っはあああああん！」

愛液を潤滑油にして、そして既に開発済のレムのアナルは、ロンウェルが準備したアナルバイブを、抵抗なく飲み込んでいく。ずぶずぶと尻穴を犯していくアナルバイブは、深いところまで挿入されたところで、そのまま自動的に円を描くようにうねうねと蠢く。

「ああああっ♡ あむっ.....ふううっ.....んっ.....んむうっ♡」

苦しそうな声を出しながら、レムは両手もグリーの肉棒の方へもどし、乳房を使いながら肉棒を咥えていく。

「っくああああ！ す、吸われるっ！ 気持ちいいっ！ また勃起するうっ！」

レムに咥えられて、グリーも苦しさで恍惚の入り混じった声を漏らす。

「あむっ.....んんんっ！ レムも、気持ちいいですっ♡ ちゅば.....んちゅ.....ああ、ステキ♡ アナル穿られるの、すごくいい♡ マゾチンポの味も、サイコーですっ♡ ちゅばっ.....ちゅるうるるっ♡ んううっ♡ ぢゅぼっ、ぢゅぼっ.....♡」

アナルを責められながら、レムは積極的に顔を動かしながら、胸と唇でグリーの肉棒を責めていく。グリーを高めながら、自分自身も高まっていき――

「ああああああ！ レム様、イキますっ♡ またイクっ♡ チンポ汁、イクっ♡」

「レ、レムもっ.....ちゅぱっ.....ちゅうっ.....ぢゅうっ.....イク♡ アナルでイクっ♡ っんんん♡ んむっ.....  
イクっ♡ グリー様、イッて下さいっ！」

レムの肉棒を貪る音と、アナルバイブのバイブ音が交差していき、そしてグリーとレムの2人は同時に

「ふおおおおっ！ 出る、出るううう！ イクうううっ！」

「レムもイクっ♡ レムもイクっ♡ アナル気持ちいいいい！ あむうううっ♡」

グリーはレムの口の中に射精をして、レムも尻を高く突き上げて全身をカクカクと揺らしながら同時に絶頂する。

「ふあああああっ！ レムりんっ！ レムりん、レムりん、レムりんっ！」

「っきゃあああ！」

まだ絶頂でビクビクと震えているレムのアナルからバイブを引き抜き、小柄な体をロンウェルはグリーから引き離すようにすると、ベッドの上から床に押し倒す。そして強引に股を割って自らの腰を突き入れるようにすると、肉棒の先端をレムの秘裂にあてがう。

「あっ.....ロンウェル様、ステキです♡」

「むほおおっ！ レムりんのオマンコもグチョグチョだよ♪ アナルでイッて、こんなにするなんていけない娘  
だあ」

鼻息荒くレムにのしかかるロンウェルがレムを見下ろすと、レムが熱いまなざしで見つめ返してくる。

「はあっ、はあっ.....レムりんっ.....レムりんっ.....」

「ロンウェル様っ.....キスしましょう.....んちゅ.....」

まるで恋人のような甘い囁き合いをしながら、2人は唇を重ね合わせる。

「ぶちゅううっ♡ んちゅっ、んちゅっ♡ ぢゅるるるるっ♡」

「ぢゅぽおおっ♡ ぢゅるるるるっ♡ ぢゅっぼ、ぢゅっぼ♡ んぢゅううっ♡」

しかしそのキスは愛し合う甘いものではなく、お互いに唇を反り返しながら、舌をだらんと伸ばし合い、本能のままに絡み合わせるケダモノのようなキスだった。そうして粘膜同士が触れ合うと、ロンウェルの肉棒とレムの秘裂がビクビクと震える。

そしてロンウェルは、既に蕩けてほぐれているレムの秘裂へと肉棒を挿入していく。

「うっほおおおおお♡ こ、これがマンコっ♡ 女の子のオマンコっ♡」

「あっ、太い.....ああああ.....ロンウェル様の恋人チンポが入ってきていますっ.....ああっ.....ロンウェル様っ」

ロンウェルの肉棒を感じながら、レムはぎゅっとロンウェルの太い手を握る。

「レムの初めて.....愛するロンウェル様に捧げられて嬉しいです♪」

「う、嘘つけええええ！」

そんなあからさまなレムの嘘に、ロンウェルは怒鳴るように言いながら、猛然と腰を突き始める。

「っあああああ♡ チンポ、すっご♡ 暴れてりゅっ♡」

「はあ、はあ！ ここここ、この奴隷ビッチめ！ 見え透いた嘘言いやがって！ おおお、お前なんかチンポ何本啜えこんだか覚えてないくらい、ヤリまくってるくせにっ！ くそう、くそうっ！」

童貞よろしく、あきらかにぎこちない腰の動きで、しかし心地よい雌肉の感覚を味わいながら本能のままにレムに打ち付け続ける。

「それなのに、どうしてこんなに気持ちいいんだよおお！ あゝ、チンポ気持ちいい♡ れれれれ、レムりんのマンコ、スツゲ気持ちいいよおお♡ ボボボボ、ボクもレムりに童貞捧げられて嬉しいよおお♡ んっほおお♡ 好きっ、好き好きっ♡ レムりん、愛してるっ♡」

「レ、レムもですっ！ レムもロンウェル様のこと、大好きですっ♡」

ロンウェルの荒い吐息に合わせてるように、レムも息を荒くしながらロンウェルの欲情を受け止め続ける。

「ああああああ！ 出るっ、出るっ！ レムりん、イクっ！ ボボボ、ボクもうイツチャうよおお♡ イク、イクうっ♡」

「はあ、はあ.....いい、いいですよ！ 出して下さい♡ ロンウェル様の恋人オマンコにたくさんザーメン注いでっ♡ 一番奥の、赤ちゃんが出来ちゃうお部屋にロンウェル様の特農ザーメンをっ」

それが上辺だけの言葉ではなく、レムは両足をロンウェルの腰に絡みつけて、両腕を首に回して、絶対に肉棒が抜けないようにがっちりホールドする。そして首を持ち上げるようにして、分厚いロンウェルの唇に貪りつく。

「あむっ.....ちゅば.....ちゅううっ.....ちゅるっ.....出して.....あむ.....恋人ザーメン、レムのオマンコにください.....ちゅばっ.....ちゅばっ」

「ふおおおおおっ.....ちゅるっ.....ちゅっ、ちゅっ♡ レムりん、レムりんっ♡ マジで好きっ！ チョー好きっ♡ 好き好き好き好き好きっ♡ 愛してるうううっ♡ んちゅうううううううっ♡ べろべろべろおおっ♡ っお おおおお～～.....おおおおおっ♡」

ロンウェルもレムの後頭部に腕を回して、レムの唇を舌を貪り尽くす。そしてそのままお互いの身体をがっちりと抱きしめながら、腰だけをヘコヘコと動かして打ち付ける。

そしてそのまま、ロンウェルはレムの最奥まで肉棒を突き入ると、その巨体を痙攣させて、舌を貪り合ったままありったけの精を吐き出す。

「はあー♡ はあー♡ こ、これがセックス.....恋人セックス♡ ふおおおっ.....おおっ.....やっとレムりんとセックス出来たっ♪ レムりんマンコで童貞卒業出来たよお♡」

「はあ、はあ.....ふふふ、おめでとうございますロンウェル様♡ あむ.....ちゅば.....」

ロンウェルが精を吐き出した後も、レムは挿入されたままビクビクと震える肉棒を感じながら、何度も何度もロンウェルとキスを交わす。

「あゝあゝ〜.....ほんと、サイコーだよお、レムりん。もう奴隷なんてやめて、ボクの本当の恋人になってよお♪ そうしたら、レムりんが大好きなこの恋人チンポ、毎日食べ放題だよお？」

「っんあ♡ っふふ.....いけませんよ、ロンウェル様。レムはあくまでもゴッデス様のモノですから」

腰をぐりぐりと動かして、まだ硬い肉棒の感触をレムに伝えるようにロンウェルが笑うと、レムは悪戯っぽく笑って答える。

「でも、ロンウェル様のお父様がゴッデス様に良くしてくれるよう言って下さるのであれば、この時間限定で、レムはロンウェル様だけのスケベ大好きな恋人になりますよ♡ ほら、ロンウェル様.....もう1回しましょう？」

そうしてレムは下腹部に力を入れて、挿入されたままの肉棒をぎゅうううと膣で締め付ける。

「っんおおおおお♡ さ、さいっつこーお♡ レムりん、ベロチューしながらもう1回♡ もう1回恋人セックスうううっ♡ ぶちゅううっ.....べろべろべろべろっ♡」

そんな獣のような声を上げながら、ロンウェルの肥満体は容赦なく小柄なレムの身体へ獣欲を枯れるまでぶつけ続けるのだった。



そして、1か月後。

ゴッデスの台頭を疎んでいるプリシラ陣営よりラムがスパイとしてゴッデス側に潜り込んだものの、結局はラムもゴッデスの前に屈服し、レムと共にゴッデスの性奴隷として仕えるようになっていた。

ゴッデスは相変わらず王選候補者のエミリアやアナスタシアを孕ませようと執心しており、たまにレムとラムとの行為を楽しむという生活であった。

そのため、有力貴族達の“接待”を担当するのは相変わらずのレムと、そして新たにゴッデスの奴隷となった

ラムの2人であった。

「ああああんっ♡ ロンウェル様っ、上手ですっ♡ すごっ、すごっ♡ セックス、チョー上手くなってますううっ♡」

「むほっ♪ レムりんのために、そこら辺の商売女を相手にた〜くさん練習したんだよ♡ おっほお、おほほほ♡ やっぱ淫売よりも、レムりんの恋人マンコの方が数倍気持ちいいよお」

四つん這いになったレムの後ろから、ロンウェルがリズムカルに腰を振り、唾液を垂れ流しながらレムの膣を味わっていた。

「っおあああ！ おおおお〜っ.....！ 姉様っ、もっと煽って下さいっ！ もっとチンポって言って煽ってっ.....！」

そしてそのすぐ近くでは、ロンウェルの兄グリーの乳首を舐めながら、手で肉棒を擦っているラムの姿が。ノリノリのレムと比較すると、ラムの方は僅かに嫌悪感がにじみ出ている表情もぎこちない。

「あむ.....ちゅば.....れろ.....ま、全く.....情けないち.....ちん.....チンポね。ラムの.....その.....あ.....アソコよりも手で擦られるのが好きだなんて——」

「アソコじゃなくて、オマンコ！ そんな言い方じゃ萎えるってばっ！」

責められているはずのグリーが、何様のつもりだと言いたくなるほどに強い語気で言ってくる。金を払っているのは彼ら（正確には彼らの親）だから、注文をつけられる立場なのは当然なのだが。

「このっ.....調子にっ.....！」

そんなグリーの態度にラムは本気の不快感を顔に出す。しかしすぐ近くでロンウェルに犯されているレムが

「あああああ〜〜〜っ♡ オマンコ、オマンコっ♡ オマンコです、姉様っ♪ オマンコ気持ちいい♡ オマンコって叫ぶの、気持ちいいいい♡」

「う、ぐ.....っ.....」

狂ってしまっただけでも、その声も姿も間違いなく最愛の妹。その妹が恍惚の表情を浮かべながら淫語を連呼している。それだけではなく、ラムも当然既にゴッデスによって性の快楽を開発されている身だ。

「れろ.....ちゅっ.....れろおお.....♡ せっかくラムが.....お.....おま.....オマンコ♡.....を、この情けない.....ち、チンポっ♡ チンポ入れていいって言ってるのに、手でイキたいだなんて♡ はあ、はあ.....チンポっ.....このチンポっ♡ ラムの恋人マンコに入れなくてもいいの？ はあ.....はあ.....♡」

グリーの硬くなった乳首を舌で押しつぶすようにしながら、グリーの言う通り淫語で煽るラム。そうすると興奮したように頬を赤らめながら、肉棒を擦る手を速くしていく。

「っおおおお〜〜っ！ イク、イクううう！ チンポ、いっくううううっ！」

レムの手の中で、腰をガクガクと揺らしながらグリーは肉棒から精を噴き出させる。勢いよく出たそれは、距離がある壁まで届き、そこを白くドロドロとしたもので汚すのだった。

「はあ.....はあ.....ね、姉様.....最高です.....気持ちいい.....！」

いつも通りプレイ前までは居丈高にラムを侮蔑するような態度だったグリーも、こうして絞られてしまえば唾液を垂らしながら恍惚な表情を浮かべて、ラムに媚びるようにしている。

そうして明らかにマゾ顔になっている雄の顔を見ると、ラムはゾクゾクとしてグリーをベッドの上に押し倒し、その身体を跨ぐようにして上に乗る。

「っうわあ！」

「あんたなんかに姉様呼ばわりされる筋合いはないわ。バツとして、この情けなくしてみすばらしいチンポをラムのオマンコに喰らしてあげる。覚悟しなさい」

「あああんっ♡ ロンウェル様っ、好きですっ♡ 愛してますっ♡ だから、もっと恋人チンポで突いてっ♡ あっ、そこすごくイっ♡ 好き、好き、好きっ♡ ロンウェル様、好きいいっ♡」

近くで犯されているレムの喘ぎ声が、ラムの理性をドロドロに溶かして欲情を煽ってくる。

ラムはペろりと舌なめずりをしながら、出したばかりでもまだ萎えていないグリーの肉棒を手で固定して、その上にゆっくりと腰を下ろしていく。

「おあっ.....あっ.....う、ラム姉様っ.....！」

グリーもクチュリと淫液の音を立てながら、肉棒の先端にラムの柔らかい媚肉の感触を感じると顔をしかめて甘い吐息を漏らす。そんなグリーを見下ろすラムの眼の色はすっかり変わっていた。

「んっ.....はっ.....っあああ♡」

そしてラムはそのまま腰を沈めて、秘裂の中に肉棒を埋めていくようにして啜えこんでいく。

「おおおほおっ.....あ、暖かくて.....絡みついてくるっ.....」

「んっ.....ふっ.....ふっふっ、全部啜えこんであげたわ。どう、嬉しい？ ラムのオマンコに情けないマゾチンポ食べられて、嬉しいかしら？ ほら、ほらあ.....」

根本まで肉棒を啜えこむと、ラムは腰を円を描くように卑猥にくねらせると、その度にグリーは身体をびくっとさせながら喘ぎ声を漏らす。

「う、嬉しいです.....あっ、あっ.....し、締め付けられて.....っああああ？ ま、待ってっ.....動いたら.....あっ、

あっ！」

グリーを焦らすように腰を緩やかにくねらせていたラムは、そのまま上下運動へと変化させていく。ギシギシとベッドのスプリング音を立てながら、秘穴で肉棒を扱くようにしていく。

「はあっ.....はあっ.....ああ、すごくイイわ.....腰が勝手に動くっ.....！」

淫液と尻肉をぶつける音を響かせながらラムが荒い息を吐く。

「あああああ〜っ♡ ロンウェル様っ、好き好きっ♡ 愛してます.....れろ.....ちゅば.....んちゅ.....むちゅ.....はあ、好き♡ 大好きっ♡ れろれろ.....好き、過ぎっ.....ちゅば.....大好きっ♡ すごい好きっ♡ はむっ.....んちゅっ.....」

ロンウェルと繋がっているレムは、相変わらず愛の言葉を狂ったように連呼している。四つん這いの格好のまま、レムは片手をロンウェルと指を絡めるように握りしめ合いながら、顔を後ろに振り向かせてロンウェルと濃厚に舌を絡ませ合わせている。

「っはあああ.....♡ ラ.....ラムも好きよっ♡ 大好きっ♡ 貴方のことが好きっ♡ 愛してるわ♡ はあ、はあ.....好きっ♡ 好きよ、好きっ♡ 大好きなのっ♡」

「おっ.....ああああっ！ ね、姉様.....ラム姉様あああ！ ボクも、好きいい！」

妹に煽られたラムも耐えきれないといったようにグリーと両手を握りしめ合い、お互いに愛の言葉を交わし合う。愛の言葉を重ねていくうちに、ラムの腰の動きも加速していくと共に、グリーも下からラムを突き上げる。

「むほおおお〜〜っ♡ レムりん、すっげ♡ すっげ気持ちいいよおおお♡ おおおおんっ♡ イクイク♡ このままボクの恋人チンポで中出しキメるよおお♡ ラブラブ恋人セックスで、幸せガチアクメキメろっ♡ イケっ、イケっ♡ んほおおおっ♡ いぐううっ♡」

「んゝあゝああ〜〜っ♡ イグっ、イグっ♡ レムもいゝぐううっ♡ んほっ、んほっ.....ほおおおっ♡ チンポきてチンポきてチンポきて下さいっ♡ ベロチューキメながら.....はふっ.....ちゅぼ.....おほおおおっ♡ んおおおお〜〜っ♡」

「うああああっ！ ラム姉様、イクっ♡ イキますっ♡ チンポイクっ♡ このまま中に出しちゃいますっ♡ イクイクイクうううっ♡ ラム姉様、愛してますっ.....んぢゅううっ.....ちゅば.....んむううっ♡」

「イ、イキなさいっ♡ このままラムの中で.....はあ、はあ.....そのマゾチンポで中出しキメて、ラムの恋人マンコの虜になりなさいっ♡ あゝっ、ラムもイキそっ.....♡ イグイグイグうううっ♡ 大好きっ♡ ああああああ〜、好き好き好きっ♡ 好きすぎて幸せっ♡ 愛してるっ、好きいいっ♡ レムのオマンコも、このチンポの恋人になるっ.....んちゅうっ.....ちゅばっ.....むちゅううっ♡」

レムとロンウェル、ラムとグリーはそれぞれお互いの身体を密着させて、深く濃厚に舌を唾液を貪り合いながら、最高の絶頂に4人同時に達するのだった。

「んちゅ.....ちゅば.....むちゅ.....れろ.....♡」

「ちゅば.....ちゅっ、ちゅっ.....れろっ.....♡」

そして2本の肉棒から精が放たれて、雌がそれを受精した後も、数十分の間そのまま言葉の一つもなく、ひたすらに唇を、舌を、唾液を貪り続ける音だけが響いていた。



その後も、レムラムの濃厚な“疑似恋人接待”は続いていた。

「ほおら、グリー様♡ 双子のW尻コキはいかがですかぁ？」

「こんなことされて硬くしてるなんて、本当に情けないマゾチンポね。こんなマゾチンポを恋人にするのは、ラムのドスケベオマンコくらいよ」

レムとラムが、ベッドに横たわったグリーの股の上で尻同士を密着させて、その間に肉棒を挟み込んでいた。双子の息を合わせながら、2人は卑猥に腰をくねらせて、グリーの肉棒を尻肉で圧迫していく。

「あ、あへ.....し、幸せえ.....おほっ.....出るっ、出るうううっ♡」

その言葉通り、至福の表情を浮かべながら、2つの尻に挟まれて射精をするグリー。

□■□■

「んほおおおっ♡ このチンポ、好きっ.....好き好き好きっ.....ロンウェル様の恋人チンポっ.....ふぐううっ.....  
っお♡ オマンコイグっ、イグっ♡ ラム、イ"ぢやう"っ.....はむっ.....ラブラブベロチューで.....ぢゆるるっ♡  
ぢゅぼっ.....んほっ♪ イグうううっ♡」

ロンウェルに抱きかかえられたラムは、ロンウェルの肥満体にしがみつきながら肉棒で突き上げられていて

「はあ、はあ.....れろおおお♡ ロンウェル様っ.....レムも、レムもイクっ♡ 乳首でイクっ♡ ロンウェル様も一  
緒にっ.....乳首で.....れろれろ.....姉様のトロトロスケベ恋人マンコの中で、愛情たっぷりのラブラブチンポミル  
ク出して下さいっ.....あ"~.....好き好きっ♡ レムも好きっ♡ ロンウェル様を愛しています.....姉様の次に  
、その英雄チンポでレムのオマンコずぼずぼされるの想像すると.....おっ、んおおおお~~~~♡ イグっ、  
イグっ♡ イグうううううっ♡」

そしてそのロンウェルの背後から、全身をローションまみれにしたレムが乳房を押し付けて身体を擦りつけて  
いる。両手は後ろからロンウェルの乳首を捏ねりまわしており、耳穴へねっとりと舌を伸ばして淫語を囁き、レ  
ムもラムも一緒に絶頂し、惜しみなくラムの中へ射精するロンウェル。

□■□■

そうして夜が白み始めて、間もなくレムラムの“接待”も終わりが近づいてきていた。

それにも関わらず、未だに終わりが見えないくらいに、ケダモノと化した4人の性の快楽を貪る宴は続いていた。

「おっほおおお～～.....♪ 姉様っ.....姉様のオマンコがグリーン様のマゾチンポの恋人になってるっ♡ チンポが出たり入ったりしてるのが丸見えですっ♡」

「んほっ♡ おほおおおっ♡ お“う、お”お“お”～～～♡ レムのオマンコも、ロンウェル様の英雄チンポのお嫁マンコになってるのが丸見えよ♪ お“っ、お”ん”っ♡ た、たまんねっ.....♡ 大好きな妹マンコが恋人堕ちしているの見ながらチンポハメられるの、チョー興奮するわっ♡」

レムは仰向けに横になり、その上にラムが乗っている。お互いに性器が顔の前に来る格好で、それぞれの秘部にはそれぞれロンウェルとグリーの肉棒が挿入されて、激しい腰使いでピストンされていた。

ゴッデスの手に堕ちたとはいえ、同じレムとは幾分か理性もプライドも保っていたように見えたラムだったが、今や“接待”に夢中のただの雌となっていた。

「デュフっ、デュフフフ♪ こここ、これで今日は最後かなあ♡ 姉様に見られながら、今日サイコーに下品で気持ちイイクメ声晒しちゃえ♡」

「はあっ、はあっ.....！ ラム姉様、サイコーですっ！ マゾチンポでイカされる姉様の声、聞かせて！ マゾチ

ンポに愛を誓いながら、イッて下さい！」

ロンウェルとグリー兄弟の切羽詰まった声と共に、パンパンという腰を打ち付ける音がどんどん大きくなっていく。長かった快樂の宴も、最高潮を迎えており――

「ん`ぬ`う`う`う`う`う`っ♡ おおおおんっ♡ イグっ、イグっ♡ 愛情たっぷりラブザーメン来てっ♡ レムのドスケベ恋人マンコに注入してっ♡ いぎいいいいっ~~.....おほっ、おほっ♡ いくいくいくっ.....イクっ、イクっ♡ 気持ちいい、気持ちいい♡ 姉様にドスケベになるところ見られながらイク~~~~っ♡」

「あ`あ`あ`あ`~~~っ♡ レムっ、レムううううっ♡ イグイグイグイグっ♡ ラムもイグっ♡ マゾチンポの虜になった恋人マンコイグっ♡ イクのっ、イクっ♡ マゾチンポ好きっ♡ マゾチンポ気持ちいいのっ♡ マゾチンポに永遠の愛を誓うわっ♡ 愛を誓いながら.....んほおおおおお~~~っ♡ .....っお`♡ お`っ、お`っ.....イク、イツたあああ~~~.....♡」

今日はもうこれで何度目か、4人は息ぴったりといった感じで同時に絶頂して、それぞれの雄の精を受け止める。

レムもラムも、すっかり理性を逸した白目を剥いた格好で、嬉しそうに笑いながら舌をだらりと伸ばして、そのまま脱力する。

そこでようやく、今回の双子の“接待”は終わりを迎えるのだった。